

フランス便り

映画文学人生論

島崎藤村 (1872-1943)

『フランス便り』1909 「東京朝日」

『海へ』1908 「東京朝日」

『生』第一篇 1887 「金港堂」

『新生』1888 「国民の友」

マロニエの花の咲くというところが待たれま
す

島崎藤村は浪漫主義の詩人、そして自然主義の
小説家として後世に名を残している。有名な詩句
には、たとえば、「名も知らぬ遠き島より流れ寄
る椰子の実一つ」がある。

そんな椰子の実のような詩人作家が、大正二年
四月、エルネスト・シモン号でフランスへ向けて
旅立った。二度と故国に帰らぬという悲壮な覚悟
を胸にひめて。

インド洋からアラビア海を経て地中海へと進む
船にはフランス人やスペイン人やユダヤ人や中国
人が乗っている。甲板から海をながめていると、
ユダヤ人が、シナ朝鮮における日本人の植民を非
難し、いたるところに勢力を植えつけようとする
日本人の野心を非難した。「日本人はりこうだ。
日本人はりこうだ・・・りこうすぎるんだ」と、
ビールのコップを手にして叫ぶようにいった。

「もしきみのいうように日本人がりこうだとす
れば、たしかにそれはわれわれの欠点だ」と、り
こうな詩人作家は欠点をみとめた。内心しやくに
さわったが、おぼつかない英語ではこんな場合に
腹のいえるようなことがぞんぶんにいえない。

やがて船はマルセイユに到着し、詩人作家はそ
の港からパリに向かう。ポールロワイヤルの町で
居をさだめ、日本の新聞社に『フランス便り』を
送りはじめた。

フランス便り

映画文学人生論



毎日毎日おおいかぶさったような暗い空もこの節ではいくらか明るくなつてまいりました。日もいくらか長くなりました。遠い町々の建物までが春めいた空気につつまれて、なんとなくかすんだ色をおびて見えるようになりました。

マロニエの花の咲くというところが待たれます。

パリの街路樹といえバマロニエだ。とちの木科の落葉樹で、夏には白い花が咲く。

そのパリへ詩人作家は、茶の実、いちよう、つばき、さざんか、藤、肉桂、じんちようげ、朝顔の種を持って行つた。種の一部は植物園などへ、あつちへ二粒、こつちへ三粒というふうに分けられたという。なかには、芽を出し、成長し、花を咲かせたものもあつた。

花のパリで花にかこまれて暮らす。うらやましいような境遇だが、七月になると、第一次世界大戦が勃発した。平和なパリは戦火にさらされることになる。戦争をしている異郷で、漂泊流離の身がのんびり暮らすのは難しい。

やむをえず、詩人作家は日本へ帰ることにした。しかし日本で彼を待っていたのは、そもそもフランスへ逃げ出さざるをえなくなった原因である。その原因からは二度と逃げ出すわけにはいかない。彼は原因と向き合い、作品化する覚悟を定めた。

我もまた渚を枕 孤身の浮寝の旅ぞ